

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2003年2月

No.31

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Published by Together with Africa and Asia Association (TAAA)

2003年2月の報告

- 2002年10月 TAAA10周年記念祝賀会
- 10月 南アMEIへ本3,034冊を送付
- 12月 行田市使用済みの移動図書館車を入手
- 12月 TAAA南ア連絡員、一時帰国
- 2003年1月 TAAA活動報告会
- 1月 連絡員、南アへ戻る
- 1月 南アにて車の輸入免税許可申請中

目次

本を楽しみに待っている南アフリカの子どもたち	2
行田市図書館車引取り記	6
マンデラ氏の演説	7
新聞記事から	8
会員からの便り／活動報告	9
寄付をくださった方々	10



デベトンの小学校で

本を楽しみに待っている 南アフリカの子どもたち

平林 薫 (TAAA 南ア在住連絡員)



カニサニ小学校（ヒルクレスト）の子どもたち

南アフリカの土地と人について

南アフリカ共和国の面積は日本の約4倍、人口は約3分の1ですが、人口はほとんど都市部に集中しており、大農場の多い中央部、半砂漠地域の南西部は極端に人口密度が低くなっています。アパルトヘイトの様々な差別の制度の中でも、最も卑劣なものといえる、人種による住み分けの制度により、かつては肌の色の違いによって住む場所が分けられていました。人種別の人口比はアフリカ人（黒人）70%、ヨーロッパ系白人10%、カラードと呼ばれる、ヨーロッパ人でもなくアフリカ人でもない規定された人々が13%、インド人およびその他のアジア人が7%です。アフリカ人はズールー、コサ、ストゥ、ツワナなど、9つの民族がある程度地域別に生活しています。白人は主にイギリス系とオランダ系のアフリカーナーです。アパルトヘイトが終わり、現在はもちろん誰がどこに住んでもよくなっていますが、結果的にはこの住み分けはまだ続いており、富を手にした一握りの有色人だけが白人居住地域、いわゆる郊外に家を購入し、移住しています。ほとんどの黒人たちは、いまだに都市部から2、30キロ離れたタウンシップ（黒人居住区）で生活しており、また近年は地方から働き口を探すために町にやってきた人々が公園などの公共の土地に掘っ立て小屋を建てる不法居住地域が広がっています。現在、南アフリカは9つの州に分けられています。

■リンボボ州

北からリンボボ川でジンバブエと国境を接するリンボボ州には、主にベディ人と少数民族のヴェンダ人が住んでいます。この州には特別際立った産業はないのですが、美しい自然と、温かく素朴な人々と出会うことができます。特にヴェンダ人は実直で、今でも伝統的な生活を守っています。

■ブラマンガ州

日の出るところという意味のブラマンガ州にはクルーガー国

立公園があり、野生動物のことを知り尽くしているシャンガン人はサファリのレンジャーなどを行っています。近年観光業に力を入れています。ヨーロッパからの旅行者が強盗に襲われるなどといった問題も起きています。マンゴーやパパイヤなどの南国の果物はほとんどこの州で生産されています。

■ハウテン州

首都プレトリアと商業都市ヨハネスブルグのあるハウテン州はストゥ語で金という意味。今でも世界一の金の産出高を誇ります。国の中心地ということもあり、人種のるつぼです。都市部を囲うようにして、中心部から約10キロあたりにカラードやインド人などアジア人のタウンシップがあり、そこからまた10キロくらい外側に黒人居住区があります。特にヨハネスブルグの場合は、金鉱山の近くに必ず大きなタウンシップがあり、鉱山の労働力を供給しています。

■自由州

真中が延々とトウモロコシ畑の続くフリーステイト、自由州。主に南ストゥ人が住み、レソトは南ストゥ人の王国です。

■北西州

北西部は世界一のプラチナの産地、北西州。ツワナ人中心の州で、その西にあるボツワナ共和国はツワナ人の国家です。

■クワズールー・ナタール州

東はズールー人の本拠地、クワズールー・ナタール州。南アフリカの第三の都市であり港町のダーバンがあります。日本から送られる本は必ずここダーバンに到着します。一年を通して温暖で、インド洋の海岸線が広がり、青々とした小高い丘が広がる美しい州です。

■東ケープ州

その下がマンデラ元大統領やンベキ現大統領などコサの人々の出身地、東ケープ州。アパルトヘイト当時は黒人のホームランド、トランスカイと呼ばれていました。土地はやせていて牧畜が主な産業という貧しい州ですが、役人たちは大きな

家に住み、高級車を乗り回しています。そして気がつくとき子供たちの教科書を購入するための資金やお年寄りに支払われる年金が消えているといったケースがよくあります。たくさんの立派な人物を排出している州ですが、同時に国内一問題の多い州でもあります。

■西ケープ州

ケープタウンのある西ケープ州は、南アフリカで最も美しい地域と言われています。ヨーロッパを思わせる緑のブドウ畑に青い海、世界でも最も珍しい山のひとつテーブルマウンテンは海側から望むと頂上が本当にまっ平らです。ここは最もヨーロッパ人が多く住み、カラード人口も国内で最も多い地域です。カラードには白人と黒人のミックスの場合もありますし、マレー半島から奴隷として連れてこられた人々の子孫、またサンやコイコイといった先住民たちもカラードといわれています。先住民たちは独自の言葉を持っていますが、ほとんどのカラードの人々は、オランダ系のアフリカーンス語を話します。

■北ケープ州

最後に一番広大な半砂漠地帯の北ケープ州。ダイヤモンドで有名なキンバリーがあります。州の西側には初春のほんの2週間くらいだけ自然の花が咲き乱れるナマクワランドと呼ばれる地域があり、近年世界中からの訪問者でにぎわっています。ここも人口のほとんどはナマなどの先住民とカラードの人々です。

このように、南アフリカでは各州が多様な自然環境をもち、あらゆる人種が共存しています。そのため、訪問する州によって、まるで違う国に来たような感覚になります。現在TAAの図書館車は、3大都市のある州、ハウテン、西ケープ、クワズールー・ナタール州で活躍しています。本に関しては、他の州の信頼できるNGOもしくは州政府のプロジェクトを支援する形で配布できればと考えています。上記の州の中でも特に北部のリンポポ州と北ケープ州はこれといった産業がなく環境も厳しいため、もっとも貧しい州です。ペノニのMEIから本をいただいてそれら地方の村へ送りたいと思うのですが、やはり一番の問題は輸送方法。南アフリカはとにかく広くて、自分で行くにしても郵便などを使うにしてもコストと時間がかかってしまいます。本自体については、どこの州でもできるだけやさしい、初心者向けの本が欲しいといわれます。現在、支援しているのはほとんど小学校ですが、今後、成人識字教育や高校への支援も検討していけるかと思っています。

クワズールー・ナタール州訪問レポート

クワズールーとはズールー人の住むところという意味。海あり山ありの美しい州で、個人的には南アフリカで私が最も好きな地域です。ズールーとは天国という意味で、彼らの住む地域が美しい天国のようだという事と、彼ら自身が優れた民族であるという意味を持っています。かつてズールー人の戦士たちは無敵で、南部アフリカ地域で最も豊かな土地を支配していました。ヨーロッパ人たちが上陸しても、その強さと誇りの高さにてこずったようです。当時、最新の武器を備えたイギリス軍を一度は破ったほどです。そこでヨーロッパ人がしたことは、読み書きをしない彼らに自分たちに都合のいい契約書を作ってサインをさせるという汚いやり方でした。その後アパルトヘイトが始まると、黒人内の分裂をもくろみ、ズールー人だけを優遇するというやり方をとりました。他の大陸や国々でも同じようなことがあったと思いますが、南アフリカはヨーロッパ人たちにめっちゃくちゃにされました。イギリス人がこの地にどんどん入植し、さとうきびの大プランテーションを作り始めたのですが、労働力にズールー人を使おうとしても、プライドが高い彼らは「畑なんかで働けるか」と言って全く使い物になりません。そこでインドから多くの労働力が導入されました。その際、すでに日本からインドに入っていた人力車が「リクシャ」という名で持ち込まれました。現在は観光地でズールーの男性たちがひいています。ズールーの社会は封建的で、かつては、王様の下に各地のチーフがおり、それぞれの地域を統括していました。経済的に豊かな男性は、ロボラと呼ばれる、牛11頭を支えれば何人でも奥さんをもらうことができました。現在は経済、社会システムが変わっているにもかかわらず、相変わらず”俺は男だ”的な男性が多いように思います。ズールー人は踊りや音楽などに秀でており、伝統的な儀式の際には素晴らしい歌と踊りを披露します。舞台と映画にもなった『サラフィナ』の制作者、出演者はほとんどズールー人です。女性たちのビーズ細



ダーバンよりフルンディヤ

工は大変美しく、現在では南ア土産の人気ナンバーワンです。今回は州教育省とNGOのELITSを訪問しました。州教育省のプロジェクト担当部門は、図書館・情報技術サービス (ELITS - EDUCATION LIBRARY INFORMATION & TECHNOLOGY SERVICES) です。クワズルー・ナタール州の州都はウルンディなので、ダーバンは一番大きな町にもかかわらず、支部となっています。州都ウルンディは、ズルーの王とその一族が代々住む地域で、ダーバンから車で3時間半北西に上がったところにあります。小さな町ですが、州都なので議員や役人は事あるごとにこの町へ赴かなければなりません。

TAAAから寄付された3台の移動図書館車

ELITSのプロジェクトは以下のとおり。

① ウルンディ周辺の MAHLABATHINI (マシャパティエーニ) 地域でのパイロットプロジェクト

昨年4月より、15校を対象に始まったが、7月にバスの故障のためストップしてしまいました。昨年末、浅見さんが必要なパーツを購入し、現地へ送っていただきましたが、まだ故障が直ったかどうかの連絡は入っていません。バス故障までのプロジェクトのレポートは以下のようなものです。

一日一校で一週間に5校×3週間でまた最初の学校に戻る。図書館車の使い方や、それぞれのグレードに合った本を選ぶこと、貸し出しカードの記入方法、借りた本の利用や管理についてなどあらかじめ各校の先生方にブリーフィングをした。問題点としては、借りた本の責任がもてないという先生がいることや、男の先生が積極的でないこと。実際、学校に本を安全に管理できる場所がない場合が多い。ズルー語、アフリカーンス語の本が少ないことや、貸し出し期間が短いことなど。図書館車プロジェクトの成果としては、学校に置いていない教材を借りられること、また子供たちが本を“自分一人で読む”ということになってきたこと。普段授業は先生が読むのを子供たちが聞くという形で、本はグループで使うことが多い。また各校の校長先生が、教室一室を図書室に変えることに積極的になってきたことなど。

② 9月末に州北東部ウボンボ地域でプロジェクト開始

このプロジェクトは、州政府が50%、地域の企業が50%支援をして図書館やコンピューター設備を整えたりリソースセンターを建設、移動図書館車はここを拠点に地域の学校を訪問することになっています。今回はこのプロジェクトを訪問したいと思っています。

③ ダーバンのELITSベースにインダンダ、ンドゥエドゥエなどの地域でのプロジェクト (今年度より開始予定)

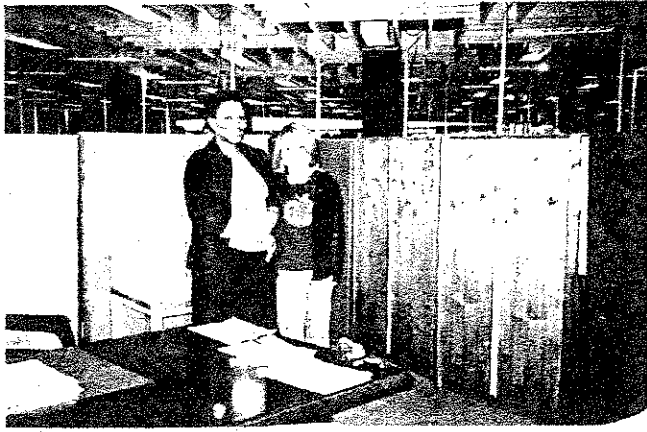
というわけで、現在はすべてダーバンより北でプロジェクトが行われたり、計画されたりしていますが、将来的には南のリッチモンドやイコボ、州最西端のバーグビル、中央部のムシガなどでもプロジェクトを行いたいと考えており、図書館車は他州とのコンペティションとはわかっていながらも、「できるだけたくさん欲しいと伝えて下さい」とのことです。ELITS館内に出動を待つ移動図書館車が置かれていました。車はカラフルに塗り替えられており、車体には“LEARNING IS FUN - THE MOBILE BRAIN BOX (学ぶことは楽しいー移動頭脳箱)”と書かれています。



ELITSの移動図書館車

ウルンディ訪問

ウルンディに到着すると、まずELITSの地域事務所へ向かった。ここで担当のピウアとフィキレに会い、パイロットプロジェクトについて話を聞きました。プロジェクトが地域の学校に与えた影響は大きく、子供たちが“本に接する”ことと“図書館”という意識をもち始めたとの事。その中のモデル校である、シヴァナンダ小学校(高学年)を訪問しました。生徒数390人の中規模の学校だが、校長のシボ・ンコシ氏(神の贈り物という素晴らしい名前の持ち主)は大変熱心で、庭の手入れなどを見ても、いい教育環境を作ろうと努力している姿がうかがわれます。学校には図書室はなく、子供たちも本を買うなどという余裕もないため、これまで本に接する機会はほとんどなかったとのこと。それがこのプロジェクトで図書館車が学校を訪問するようになり、子供たちももっと本を読みたいと言うのだそうです。「先生、この次バスはいつくるの?」と何度も聞かれるそうで、皆、早く故障が直ってまたプロジェクトが始まるのを待ち望んでいます。校長は、「日本からこんなに遠くにいる子供たちの支援をしてくれるなんて本当に感謝しています。移動図書館車のプロジェクト



シボンギレ・ムジマンデと

が子供たちに与える影響は計り知れないものです。」と言っていました。学校訪問の後、巨大な州省庁ビルへと向かう。この小さな町に違和感のある建物。教育省本部でミーティング中のシボンギレ・ムジマンデと挨拶をしました。大きくて年配のちょっと怖そうな女性を想像していたのですが、ずっと若くてきれいで聡明な女性でした。

教育省にはこれまでのところ本は送られていないようですが、バスに積み込む本がまだまだ足りないとの事なので、ダーバンへ送付の際、教育省宛にも送っていただければ、各プロジェクト地域へ配布されることと思います。また、まだバスが走っていない地域の学校へも地域担当者が訪問する際に届けられると思います。教育省のポスターに、“TODAY A READER, TOMORROW A LEADER (今日は本を読み、明日は指導者)”というなかなかいいキャッチフレーズがあります。まさにプロジェクトによって本に接した子供たちの中から、明日のリーダーが生まれるかもしれません。

ダーバンのELET訪問

翌日はNGOのELETを訪問。私がまだこちらに住み始める前に一度訪問してから7年くらいになります。所長のMR MARVIN OGLEは相変わらず優しい笑顔で満面にたたえていました。30分ほどミーティングをもちましたが、その間もひっきりなしに電話が入り、とてもお忙しいそうでした。近年多くのNGOが抱える問題ですが、やはり資金確保が大変とのこと。NGOにとって、プロジェクトを着実に続けていくためには、スタッフの力はもちろんですが、やはり強い信念を持ったリーダーが必要なのだと思います。MR OGLEと話していると、まさに“NGOの人”といった感じで、地道なプロジェクトを着実にやっているその姿勢に頭が下がります。その後、スタッフのシボンギレ・シスルが手配してくれたミーティングに入ります。現在ワークショップに

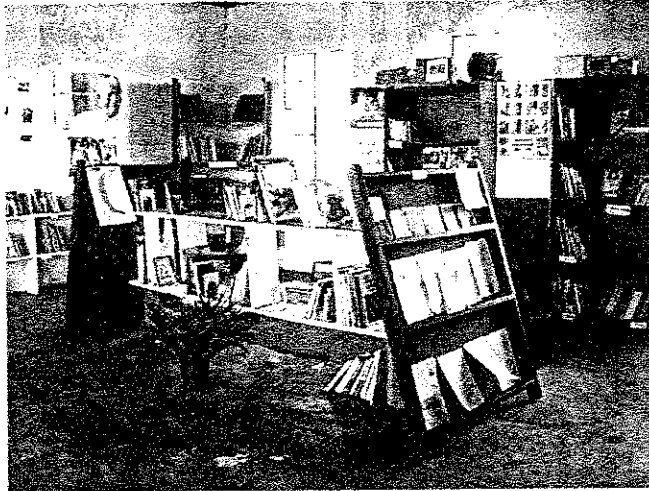
参加している各地域からの先生方がこの日集まってくださいました。ワークショップはSLOT (SCHOOL LIBRARY OUTREACH PROGRAMME 学校図書室推進プログラム) というもので、年10回開催されます。7名のFACILITATOR (ワークショップの先生) ももちろん学校の先生方で、自分たちの仕事も忙しい中、ボランティアで教えています。今回ミーティングに参加してくれた大きな大きな先生は、100キロ南の海沿いの町ポート・シェブトンからわざわざ駆けつけてくれて、彼女の学校での図書室活動の様子を報告してくれました。今回は、彼女の学校をぜひ訪問したいと思っています。参加者6名のうち、ダーバン市内からは一人だけインド系の先生が参加したのみで、あとは皆地方の小さな村の学校の先生方でした。どの学校も図書室はなかったのですが、ELETのワークショップで学んだあとに始めたプロジェクトによって、子供たちが本に親しむようになったと成果を報告しています。またTAAAから届く本はとても役立っていると感謝の言葉を皆からもらいました。やはり現状としては、地方に行くほど設備や資源が乏しく、図書室のない学校が多い。そんな学校では、教室の片隅にコーナー・ライブラリーを作ったり、コンテナを寄付してもらい図書室にしたりしています。また、子供たちに自分で本を作らせるプロジェクトはなかなか面白い。中には驚くほどの才能を発揮し、興味深い物語を書く子もいるそうです。本を使って“リサーチ”させるプロジェクトをしている学校もあります。TAAAから送られてくる本で、童話や小説、参考書などが特に役立っており、小学生に難しいものは、成人識字教育センターなどでも活用されているそうです。希望としては、1、2年生用の絵本の類がもっとあるとうれしいとのこと。また、少しずつ本が増えてきても棚がなくて積み上げており、なんとか本棚を購入したいが資金が足りないという声が多くあがっていました。



大きな大きな先生たちと

ダーバンから内陸部へ

翌日、ELET のシボンギレと内陸部のヒルクレストの学校へと向かった。周辺は“THE VALLEY OF THOUSAND HILLS (1000の丘の谷)”と呼ばれ、その独特の美しさに訪問するたび魅了されます。谷底にダム湖があり、カニサニ小学校は湖のすぐ横にあります。生徒数 383 人、グレード 0 から 7 までと、幼稚園も併設されています。カニサニ小学校の校長マンバ氏は、就任以来 4 年間で学校をモデル校にしてしまいました。就任当時の学校の写真を見せてもらいま



カニサニ小学校の図書室

たが、校舎はぼろぼろでひどい環境。現在はよく手入れされた庭と、学校菜園、校舎はきれいに塗り替えられており、教室の一つを図書室に改造、あらゆる図書プロジェクトを行っています。子供たちの勉強意欲も高まってきており、昨年はずルー人のズマ副大統領も学校を訪問したそうです。ノクボンガ先生は、「図書室ができてから子供たちの本に対する興味と、また自分たちで詩や物語などを創作する意欲が湧いてきた」といいます。カニサニ小学校の一年間の学費は一人 70 ランド (1000 円弱) とのことで、校長先生も「この地域でこれ以上はとれないから、なんとかやりくりしています」と言っていました。こんなに美しい環境の中にある学校で子供たちはのびのび育ち、そのきらきらした目を見てうらやましくなっていました。カニサニは“光”とか“輝き”という意味。ELET や TAAA と共に、彼らの輝く目の中にある限りない可能性を引き出すための力になれたらと思いました。

今回の訪問から、クワズルー・ナタール州教育省や ELET の努力と TAAA の支援が一体となって、確実に成果をあげているのを強く感じました。今年は移動図書館車が学校を訪問している姿を是非見に行きたいと思っています。

行田市図書館車引取り記

師走の忙しさを控えた12月初旬の週中日。冬の弱々しい陽を浴びながら県立図書館の北爪さんと高崎線吹上駅で待ち合わせた。昼食を済ませ、タクシーを拾って行田市立図書館に着いたのは1時を少し回ったころだった。埼玉古墳群を間近に控える行田市は家並みの低い、穏やかな地方都市の風情。公園に隣接してゆったりと佇む2階建ての図書館。案内されて事務室でお茶を飲んでいると、担当の方が忙しく出入りしている。間くと近々移転が決まっており、次の館舎の設計の打ち合わせに忙しいとの事。南に大きく開いた窓から入る陽に暖められて、黙っていると眠ってしまいそう。程なく館長の清水さんがニコニコ現れ、「いや～大変ですよ～(移転が)」と、のんびり答えた。北爪さんとの業界内部話を横で聞きながら、図書館関係の世界を垣間見たようで面白かった。

小一時間待たされてやっと譲渡の段取りに。キーの引渡し、譲渡証の引渡し、関係者のお別れ会、それに先立ち送り先の説明会等を予測していたのだが一切なし。「これが

浅見克則

キーです。」とあっけなく渡されただけの超簡素な引渡し式。館長と担当の方の見守る中、いつものように仮ナンバーを取り付け、運行許可書をウインドウに貼り付け、一発でかかったエンジンを一吹かして軽く会釈して助手席の北爪さんと図書館を後にした。

この車は NISSAN のシビリアン改造車。ケーブタウンを中心に活躍する教育開発担当者のジューン・パーチェスを介して西ケーブ州で使われる予定だ。回送中に各部の状況をチェックする。長い時間放置していたために起こるタイヤの扁平は 20K ばかり走って消える。走行距離の割に痛んでいるのが図書館車の常で(四六時中満載しているので無理もない)空荷で走ると各部がガタつく。ブレーキの片ざさが若干あるようだ。数ヵ月後にはどんなドライバーがこの席に着きどんな景色の中を走るのか?などと夢想しながら夕闇の新大宮バイパスを巡航していると、ウインドウの向こうに赤茶けた山々の麓から広がる草原の中、うねりながら彼方に消える南アの埃っぽい道が一瞬見えた。

マンデラ氏ブッシュを傲慢な人種差別主義者と非難 （トロント・スター 2003年1月30日）

ヨハネスバーグ(AP) ネルソン・マンデラ元大統領は、米国のジョージ・W・ブッシュ大統領を傲慢で近視眼的であると発言、国連を無視してイラク攻撃を進める熱狂ぶりを人種差別にもとづくとの見方を示した。

今日の演説の中で、マンデラ氏は、米国民に反ブッシュの大規模な抗議に加わるよう訴えた。氏は、世界各国の指導者、特に国連安保理で拒否権をもつ国の指導者にブッシュに反対するよう呼びかけた。

「先見の明なく、適切に考えることのできない大統領をもつ一つの大国が今世界をホロコーストに落としこもうとしている」と、マンデラ氏は国際女性フォーラムで語った。

氏はまた、イラクも武器査察官に十分に協力していないと非難し、南アフリカは国連により支援された対イラク措置はすべて支援するだろうと述べた。

ホワイトハウスのアリ・フライシャー報道官は、マンデラ氏の批判に対して、欧州8か国の指導者がブッシュ氏に対し支持の書簡を寄越していると指摘した。

「ブッシュ大統領は、欧州の多くの指導者が明らかにマンデラ氏とは違う考えを持っていることに感謝の意を表明している」と、フライシャー報道官は述べた。「彼は、このまま行けばホロコーストになりかねない増大しつつある脅威に対して何もせずにいることのほうが心地よいと思う人々が出てくることを理解している」

ノーベル平和賞受賞者であるマンデラ氏は、これまで数か月間に繰り返し、米国の対イラク姿勢を糾弾し、ブッシュ氏に国連の権威を尊重するよう要求してきた。しかし、30日

の氏の発言は、いっそう批判的であり、これまでよりはるかに強くブッシュその人を攻撃している。

「なぜ米国はこうも傲慢に振舞うのだろう」「(ブッシュ氏が)望んでいるのは、イラクの石油にほかならない」と氏は言う。

氏は、ブッシュ大統領と英国のドニー・ブレア首相を、国連の存在を形骸化し、ガーナ人のコフィ・アナン事務総長をないがしろにしていると非難。

「これは、事務総長が黒人だからなのか。もし白人だったら、彼らはこんなことはしなかっただろう」

マンデラ氏は、第三次世界大戦がこれまで勃発しなかったのは国連があったからこそだと述べ、イラクに対する処遇も国連が決定すべきだと主張した。

また、無情にも広島と長崎に原爆を落とした米国には、世界の警察となるような道義的権威がないと述べた。

「もし世界に、言語道断な残虐行為を働いた国があるというなら、それはアメリカだ。アメリカは人間を何とも思っていない」

「彼らは、世界の警察官をもって任じ、イラク民衆のために、何がなされるべきか、その政府と指導者をどうするかを決めるような何者だというのか」

ブッシュ氏は「大虐殺を引き起こそうとしている」と、氏は語り、米国民が投票によって彼をその地位から追い、彼の政策に対して反対の意を示してほしいと呼びかけた。

また、ブレア首相についても、米国を強く支持していることを糾弾した。

「彼はアメリカの外務大臣だ。もはや英国の首相ではない」

私もひとこと

昨夜ニュースでスピーチの模様を簡単に放映していたのですが、思わずテレビの前で大拍手！皆が思っている、やはりこれをいえるのはマンデラ氏だけです。日本では詳しく報道されましたか？

やっぱりマンデラ氏はすごい。世界中で、本当のことが言えるただ一人のリーダーかもしれません。南アフリカはこんなリーダーを持っていることを誇りに思わなければ、やはり彼がいたからこそアパルトヘイトを終わらせ、平和的に民主的な国家を築くことができたのだと、改めて感じています。この強い口調のあと、もちろんイラクに対しても国連の査察に協力するように、そして南アフリカは国連の判断を支持する、と付け加えています。

本当はブッシュとブレアの目の前で言って欲しかったのですが……。

南アにて 平林薫

日本では上記の演説の一部が30日、2分間程JNNニュースで夕方流れ、数日してマンデラ氏の自宅での記者会見で、「アナン事務総長の了承が得られれば、自分がイラクへ出向いてでも反対する」と発言しているのが同じくJNNで放送されました。気をつけて見ていましたが、この他には新聞、TVでの報道はなかったようです。ご覧になった方は教えてください。

2月12日朝日新聞はクマロ南ア国連大使の発言を報じています。「米英主導で物事が決められる。全加盟国の意思を反映させるようにしたい。南アフリカの武装解除も2年かかった。イラクは今回の査察が始まってまだ2ヶ月強。査察団が必要とするだけ時間を与えよ」

野田千香子



青い車体に「まつの木号」の文字が入ったお古の移動図書館が、南アフリカ共和国の貧困街を砂ぼこりを上げて走る。

ヨハネスブルク郊外の黒人居住区。バスには、日本の中学生が使った教科書など英語の本3千冊を満載。学校に到着するや、たちまち現地の子供たちの輪ができる。松伏町で移動図書館の役目を終え、再整備されたバスで、5年がかり活躍中だ。

送り主は、さいたま市に本部を置くNGO「アジア・アフリカと共に歩む会」(略称TAAA、A、野田千香子代表)。

南アでは04年、国民投票の結果、アパルトヘイト(人種隔離)政策が撤廃されたが、いまだに経済や教育の人種格差は大きい。TAAAはその2年前から、「識字教育に

南ア走る希望の図書館



役立てて」と用済みになった英語の教科書や小説、移動図書館を現地に送っている。これまでに支援した本は約22万冊。移動図書館は、田浦和志、所沢市、狭山市など県内の自治体から譲り受けたものを中心に13台に上る。

「英語がわからないと病気になるのも処方箋も読めないし、仕事もない。黒人が社会を担うには英語という道具が必要なのよ」。野田さんが11年前、都内にあつたアフリカ民族

会議(ANCC)の国内拠点をボランティアをしていた時、来日したANCの女性リーダーのこんな言葉が胸に響いた。

アイロンにミシン、台所用品……彼女が貧困層に必要な物資を挙げた中で、「これなら私でも」と思えたのが、英語の本だった。TAAAを立ち上げ、個人やインターナショナル・スクールから古い英語の本をもらって船便で送った。2年後、初めて南アの地を踏んだ。現地の本不足

は思っていた以上に深刻で、砂漠に水を注ぐようなものだった。「多くの子供たちに渡るには移動図書館が必須だ」と支援の輪が広がっていった。

メンバーは、高校教員や会社員、学生などさまざま。土日を利用してボランティアで活動している。本や車の運搬は、兩船三井が引き受けてくれるが、車の整備費や輸出手続きの費用は慢性的に不足している。

「『地球の片隅に応援している人がたくさんいるよ』という気持ちを伝えたくて。でも平等化の実現にはまだまだ支援が必要です」と野田さん。

今春にも、行田市から譲り受けた14台目の移動図書館が仲間入りする。

活動を広く知ってもらおうと、12日午後2時、さいたま市の県労働会館で報告会を行う。参加費500円。問い合わせは、野田さん(☎048・8332・8271)へ。

「まつの木号」を視察したネルソン・マンデラ前大統領1989年、南アのヨハネスブルク郊外で(TAAA提供)

ホームページが更新されています

ホームページアドレス <http://www.h4.dion.ne.jp/~taaa/index.htm>

会員からの便り

◆今春下の娘が就職し、ほっとすると同時に何かしたいという気持ち湧き上がってきました。そんな時、偶然図書館で借りたODA関係の本にTAAAの紹介が載っており、英語の本を南アに送る活動とありました。もしかしたらお役に立てることがあるかもしれないと思い、すぐに野田代表にお電話をし、今に至っています。

2002年夏に始めて参加させて頂き、まだ半年にもなりません、その間南ア連絡員平林さんの帰国報告、10周年記念パーティなどがあり、ほんの少しですが会の様子が分かって参りました。

日本国中から寄せられました温かい心遣いの一つ一つに深く感動し、また頭の下がる思いが致しております。

今の私に何が出来るのかを考えつつ、これからも可能な限り会に関わって参りたいと存じます。

山下八千穂(目黒区)

◆皆様はじめまして！10周年記念パーティにお邪魔させて頂きました。NGOの活動への関わりはJVCという団体のアフリカチームです。その「南アフリカ丸分かり講座」という公開講座に参加したことが南アフリカとの縁のはじまりです。今もJVCにも参加しています。JVCとTAAAは後で知ったのですが結構繋がりがあつたようです。活動内容としては文旬なしにTAAAのほうが優れていると私は思っています。という以上に私自身は数あるNGOの活動の中でもTAAAの活動こそ、『これこそがNGOの活動！』と認識しています。小さ

な団体でよくそここまでと、野田様はじめメンバーの皆様の努力とご苦勞に感嘆の思いで敬意を表したいと思ひます。ただJVCのほうにも自分の息子や娘ぐらいの若い人達と同じ活動仲間として対等に接していけば、私の日常の場ではなかなかない経験ができるという魅力があります。これから可能な限りTAAAの活動のお手伝いをさせて頂き、色々なことを学んでいけたらと願っています。
斎藤和世(越谷市)

◆皆さん、こんにちは。初めまして。

私が住んでいる小さな与野市(現:さいたま市)に、TAAAがあることを知り、7月より参加させて頂いております。

自分が箱詰めした本が、船に乗って遠い南アフリカで子供達の手に渡っていくなんて、本当に嬉しいことです。会報や10周年記念誌・そして南アにお住まいの平林さんからのレポートを繰り返し読むうち、南アの皆さんがどれほど楽しみに待っていてくれるのかを知り、まだ見ぬ南アでの光景を頭の中に描いています。

1冊の本が子供達の教育に役立つことは、もちろんですが、子供達の心には葉っぱの葉脈の広がりのようにたくさんの感性が生まれ、吸収されていくのだらうと信じます。例えば、本の感想をお友達や家族に話すことだつてとても楽しいことだし、次にいつ移動図書館が来るのかなあと待つのは、本当にワクワクすることです。ひとつずつは小さな出来事でも、大人になってから思い出ししてみると本当に暖かい想い出で、心の支えとなることでしょう。これは自分の体験からも、わかることです。

私は学校に行くのが、大好きでした。南アの皆さんにも、楽しい学校生活を送ってほしい・・・と願いながら、これからもお手伝いを続けていこうと思っています。

西村裕子(さいたま市)

××

◆主な活動(2002年9月26日~2003年1月30日)

- 9/28 セントメリーインターナショナルスクール本引取り 浅見克則
- 9/28 10周年について会議 浅見 野田千香子
- 10/3 ELET より子供たちの作文が届く
- 10/6 TAAA10周年記念祝賀会 マカドゥジ南ア大使 マンパーニ参事官他25人
- 10/10 JVC 津山直子さんとマンドラ・メントールさんの報告会出席 野田 斎藤和世
- 10/11 10周年記念誌発送 井出利栄 井出千亜紀
- 10/27 作業と会議 野田 北爪健一 山田玲子 浅見 日名徹一 アンドリカ・レツアロ モガリ・ファケデ セシル・マトロー 荒井理恵 松島康智 村泉巨竹 安部弥生 岸智則 ケンサニ・マンパーニ
- 10/30 南アのM日へ本送付 野田
- 10/28~11/9 会報30号編集 山田 野田
- 11/10 会報30号印刷製本と会議 埼玉県国際交流協会にて 山田 北爪 野田 浅見 下谷秀道 山下八千穂 西村裕子 斎藤
- 11/11 移動図書館車の件で林田製作所へ 北爪
- 11/14 会報発送 井出
- 11/26 KZN 移動図書館車修理部品発送 浅見
- 12/10 行田市より移動図書館車廃車証明受領 北爪
- 12/14 TAAA ホームページへ最新情報を入れる 大久保忠人
- 12/15 作業・会議と忘年会 野田 下谷 北爪 浅見 安部 西村 アンジェラ・アントナス
- 12/18 整備工場へ図書館車を搬入 北爪 浅見
- 12/20 南ア連絡員 平林薫 一時帰国
- 12/21 シャローム教会より寄付受ける 「歌の会」へ参加 安部 野田
- 1/6 会議 平林 久我祐子 野田
- 1/9 福原秀夫氏と会議 賛助会員依頼について 野田
- 1/12 朝日新聞朝刊埼玉版にTAAAの活動が報道される
- 1/12 河合塾の味岡氏、小田氏と会議 野田 浅見 平林
- 1/12 TAAA 報告会 埼玉県労働会館 平林薫 参加者30人
- 1/20 平林 南アへ戻る
- 1/26 西ケープ州のジューンと連絡、車の免税依頼について 協議 平林